

患者らの視点を医療に



がんの地域情報について話し合う患者や家族たち＝名古屋市千種区の愛知県がんセンターで

◆がん患者らの体験集め、発信

患者や家族らが班に分かれて討議した。テーマは「患者必携・愛知県」にどんな情報を盛り込むか。「患者必携」とは、東京の国立がん研究センター内にあるがん対策情報センターが、がんの最新知識や患者へのアドバイス、療養生活のヒントなどをまとめた労作で、同センターのホームページで公開されている。この全国共通情報と併せて、身近な地域情報を提供していくのが「愛知版」の目的。盛り込

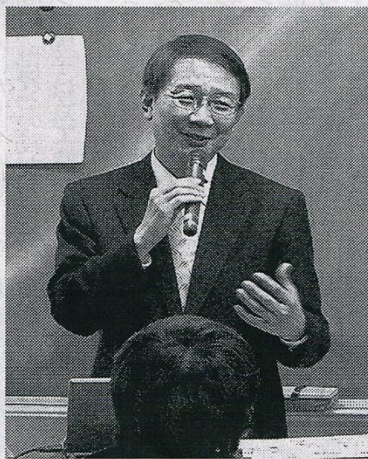
「患者必携」愛知な

の中に、疾患別の治療成績や心のケアの対応を書いてほしい」「患者が利用しやすいイラストレーションガイドを」「若い乳がん患者

相談先、

は、使いやすい情報を提供することが不可欠。そのために患者さんの視点を取り入れていきたい」と話す。今後、情報発信の

全国版



がんで娘を亡くした遺族の思いを語る鈴木中人さん＝名古屋市東区の市中央看護専門学校で

「看護師さんが『景子ちゃん、命は短かったけど、幸せだったと思えます』と言ってくれて、その言葉に本当に救われました。よき医療は、グリーフケア(死別の悲嘆へのケア)につながるんです」鈴木中人さん(55)＝愛知県豊田市市の体験談を、看護師の卵たちが目に涙をためて聞き入る。名古屋市中区、名古屋市中心看護専門学校で本

◆子を亡くした親が講師に

年度から始まった「臨床いのちの講座」。講師を務める鈴木さんは、一九九五年に長女景子ちゃん(当時6歳)を小児がんで亡くした。その後、大手企業を早期退職し、NPO法人「いのちをバトンタッチする会」を設立して、いのちの大切さを心に植え付ける活動を続けている。

ま。子どもへの病名告知、抗がん剤治療の苦しみ、闘病する子どもたちの生命の輝き、延命治療

受講した学生たちは「小さな子でも、自分の死を近くに感じることができると知り、すごく驚いた」生きていてほしい。でも、薬にしてあげたい。そんな思いを私

看護学校で心の授業

な家族の思いを私

をめぐるとの迷い、遺族が抱く悲しみ、怒り、後悔…体験に基づいた問い掛けは重い。

入学直後に患者の生命をめぐるとの問題を総論的に伝え、二年生で終末期ケア、グリーフケアの学びを深め、卒業直前の最終講で「心ある医療職に育ってほしい」とメッセージを贈る。

同校での講座は、七

味は大きい」と期待する。